

大木充・西山教行編 (2011)
『マルチ言語宣言 なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』
京都大学学術出版会、242頁

平 畑 奈 美

なぜ英語以外の外国語を学ぶのか。本書におけるこのテーマは、研究主題としての固定された問いではない。本書は、「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」における複言語主義の基本理念を踏まえて日本の外国語教育の展開の可能性について検討する、研究書としての性質も一部帯びているが、全体としては、実際に自ら「英語以外の外国語」を学び、その理解を深めてきた人々が、それぞれの過去の経験と蓄積に基づいて外国語学習の価値を多方面から語る啓蒙書である。従って、問いへの答は読者に開かれている。

この問いの背後には言うまでもなく、外国語学習の領域で英語一極支配の進む中、かつては疑う余地もなく自明のものとしてあった「英語以外の外国語＝第二外国語」学習の価値が脅かされつつある日本の現状があり、それに対する危機感は本書文中においても繰り返し表明される。この文脈においてなされる「マルチ言語宣言」は、様々な言語がそれぞれに独立して示す、その言語の価値を、ただ集めて発信しようとするものではない。この危機の中で外国語関係者が連携し、読者の母語(おそらくは日本語)と英語(社会的に習得への圧力の強い言語)に加え、第三の言語を学習することの意義を訴える、いわば共同声明となっている。本書の追及するその意義とは、複数言語の学習経験を持つことが人間の視野を広げ、世界の文化の多様性を守ることへとつながるというものである。グローバル化に伴って世界の文化の均質化と、文化/言語の破壊、消滅が日々進行する。複数言語の学習、理解は、それに立ち向かう力となるのだ。学術書としては比較的肩の力の抜けた本書のタイトルには、こうした外国語学習の新しい認識と外国語関係者の新しい関係を構築しようという、大きな試みに対する執筆陣の希望のようなものがそこはかとなく感じられる。

本書は二部から構成される。第I部は、大木の『『ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)』に学ぶ外国語学習の意義』に始まる。冒頭、OECDが「ことば (language)」を、グローバル化する現代社会で個人に求められる重要な能力 (key competencies) のすべてに関わるものとして位置づけていることが提示される。今日の国際社会で、いかに「こ

とば」の能力が重要視されているかを改めて示すものであるが、この「ことば」の能力には指定がないこと、つまり、それが「英語」の力のみを示すと解釈されかねないことに大木は警鐘を鳴らす。これが、言語の一極集中を戒め、文化の多様性を尊ぼうという、本書を通底する主旋律へと結びついていく。

この序章に続き、朝鮮語、アラビア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語という、各言語の視点、あるいは、各言語を学ぶ／研究する視点から、それぞれの言語学習の意義が語られる。この部分には、各言語の個性とともに執筆者の個性が表れていて興味深い。何をもってその言語の特徴とし、その言語の学習の意義とするかという点に、その執筆者の立ち位置と主張が如実に表れるからだ。フランス語（東郷）、ドイツ語（齋藤）においては、言語そのものの形態についての解説に相当の紙面が割かれる。アラビア語（岡）においては、国際社会の中での、この言語の歴史的、政治的意味合いに、スペイン語（塚原）においては、近年の外国人住民の増加の結果生じた日本国内における多言語使用状況に、ロシア語（服部）では、その言語学的特徴と並行して日本とロシアの二国間関係に、それぞれ重点が置かれる。このようにして第Ⅰ部では、言語自体の持つ奥行きと言語使用の背景が、専門家の力量に支えられて豊かに描き出されているため、図らずも比較言語学の入門書の如き様相も呈しており、外国語一般に興味のある読者にとって、その知識欲を満たせる魅力的なものになっている。その一方で、そこかしこに、言語研究と教育に携わる執筆者の心情が等身大の姿で吐露される部分もあり、外国語教育関係者の共感を誘うだろう。白眉は「第Ⅰ章 朝鮮語—思考停止の外国語」における小倉の述懐である。小倉は朝鮮語について語る前に、まず、「外国語、特に英語以外のそれ」を学ぶべきであるという主張に対して、素朴かつ説得力のある命題を提示する。「ひとつの言語の中に閉ざされ」た人たちは、「端的にいつ『多極的世界観』には適合しないということになる」のだろうか。そして、「複数言語を知る人が文化の多様性を尊重するだろう」という前提は果たして有効なのだろうか。複数言語を知る人とは、実は各文化への参与によって、「文化の多様性を破壊する人」となるのではないか。外国語のできない無数の人々が豊かな文化を生み実りある人生を送ってきたこと、外国語のできない人たちがばかりであった時代こそ文化の多様性が最も守られた時代であったということに、外国語教育関係者はどのように答えるのか。小倉は、これらの疑問を明示した上で、「英語の普遍性を主張する人たち」のあまりに急速な文化破壊を止める一種の「緊急避難」としての、英語以外の言語学習推奨の価値を認める。次に小倉は、「苦しく、暑苦しい朝鮮語」という項以降、自身にとって「道徳」と「贖罪」の象徴であった朝鮮語を教える者としての葛藤、さらには、

かつてドイツ語を学習した経験を持ちつつ、ヨーロッパ言語の世界の、小倉の言うところの「上品なアカデミズム」に匿われることのできない「持てない者」としての葛藤を、多少の戯画的な誇張を交えつつ語り、外国語教育がその背景に、その言語と文化の威信の力の非対等性を抱えていることの矛盾を暗示する。

私事とはなるが、筆者自身は日本語教育に従事する者である。国内では「第二外国語」の教師ではない。そして、その任務のいくつもの名目の中に、世界の「文化の多様性」への貢献という使命を抱えて、いわゆる発展途上国と呼ばれる国々に派遣された過去を持つ。在住日本人が数十人しかいない国で、日本語を学ぶために講座に詰めかける人々、教科書を買う費用に事欠きながら学習に没頭し、日本企業への就職の夢を語る学生たちを見て、何の誇張もなく、夜も眠れないほどの焦燥を感じた。英語教師を羨み、自分が英語のように「役に立つ」ものを与えられる人間であったなら、と願いつづけた日々であった。この環境で文化的多様性の尊重を語ることの痛みを、「上品なアカデミズム」には理解されないであろうという諦観の中で長年過ごしてきた筆者にとって、小倉の指摘こそ腑に落ちるものであり、この現実への言及を回避したままで複数言語学習の価値を語る姿勢には物足りなさを禁じ得ない。その一方で本書によって、「英語以外の外国語」という、この字面だけを見れば英語に対して若干差別的であり、完全に文化的に寛容であるとは言いがたい用語をあえて作りださなければならぬほど逼迫した状況の中で、筆者の抱いたものに近い焦燥を、「役に立たない」外国語の関係者が共有し、痛みを分け合う機運が生まれていることが実感できた。考えるに、恐らく今我々がなすべきことの本質とは、「役に立たない」ものとは真に役に立たないものであるのかを問いなおし、どれほどの困窮、苦痛の中にあっても、「知る」ということ、教育を受け教養を得るということが、象牙の塔の住人に留まらない、すべての人間のうちにゆるぎない拠りどころを築くという事実を、我々の持つ「ことば」の能力を駆使して訴求することにあるのではないだろうか。

その意味で、国際政治、言語政策といった分野の各有識者の、「多言語主義による多極的世界観の構築」に関する論考を集めた第Ⅱ部は、それぞれ示唆に富む。「ゆっくりと進行する人類の死」としての諸言語の統一を危惧し、外国語学習が持つ「他者や未知の者に対する恐怖」を拭う機能と、「遙か彼方へと、慎ましやかな人々の言語へと」手を差し伸べることの重要性を強調したドヴィルパン、ポスト9.11の世界状況から多言語教育をとらえる佐伯、かつては英語に対抗することそのものを使命としていたフランス語が、「多様性の普遍性」を使命とするに至る経緯を語るグラズィアニ、そして、ヨーロッパ言語参照枠の掲げる複言語主義、すなわち、様々な文化と結びついた様々

な言語を学ぶ意志そのものを尊重しようという考え方を評価した上で、日本における複言語主義の導入とは単なるヨーロッパ地域統合の推進理念の導入であってはならないことを確認し、他者との共存のための社会的共通資本としての言語教育を論じた西山と、充実した論考が並び、最後に、日本の国策としての多言語主義の可能性を投げかける三浦の特別報告をもって本書は締めくくられる。

全編を通して繰り返し現れるテーマとは、ことばは他者と共に生きるためにあるという主張である。いみじくも本書第Ⅰ部において岡は、外国語を「他者の舌」と表現し、他者の舌を使うことのもどかしさと、他者の舌で世界の「甘みも苦みも」味わうことの驚きと可能性を語った。確かに、言葉を学ぶ人とは他者を求める人である。他者とは生きている他者、すでにこの世を去った他者、この世にいるかどうかわからない他者、自らのうちにある他者のすべてを含んでいる。求めるものがあるという時点で、その人は飢えた弱い人であり、だからこそ新しい世界を常に渴望し続ける。小倉が言うように、別に外国語ができなくとも、人として充実した人生を送ることはできる。外国語能力の高さが、人間の社会階層や、「役に立つ」度合を定めるものであってはならない。他者の舌を自らの舌とする意志とは、「外部」に人がいるということを受け止め、向き合うこと、自分は孤独な人間であり、様々な限界や不自由さを引き受けてでも、人を必要としている人間であるというその弱さを認め、人間であることを尊ぶ姿勢の表れなのである。

本書は、他者の舌を愛おしむ弱い人間であることを恐れなかった人々の、気概の一冊と言えよう。

(滋賀大学国際センター)